第5号　令和6年12月24日発行

長崎県立佐世保北中学校・高等学校
長崎県佐世保市八幡町6番31号
TEL　0956-22-4105/FAX　0956-22-5361
URL http://www.news.ed.jp/sasebokita-h/

「自信」と「集中力」、そして楽しもう～

事務局長　田中　直文

今年も残すところあと１週間余りとなりました。４月に転勤してきて、あっという間の９ヶ月でした。１２月になり、なんとか冬らしくなりましたが、今年を振り返ってみると特に暑い夏でした。事務室にあるデマンド制御装置がよく鳴り響いていたのを思い出します。佐世保市の今年４月から１１月の気温を見てみると、夏日１５３日（令和５年：１４９日）、真夏日８５日（令和５年：７５日）、猛暑日２８日（令和５年：８日）と全て昨年を上回り、特に猛暑日が多く、まさに暑い夏でした。

私にとって今年の夏は、これまで、まったく野球に興味を示さなかった高校３年生の息子が、野球に興味を示した夏でもありました。私はどちらかと言えば野球派で、少しでも野球に興味を持ってもらえばとの思いから、大谷翔平選手モデルのグローブを小学生の時にプレゼントしたのですが、特に興味は示さず、ほのぼのとした親子のキャッチボールも１・２回で終わり、今では押入れの片隅に眠っているのを思い出しました。そんな感じの息子ですが、８月のお盆の時期、私がテレビで高校野球を見ていたら、野球のルールについて知りたくなったらしく、私の解説付きで一緒に観戦しました。一定ルールを理解できたのか、野球の面白さに気づいたようでした。そして、これまでの高校野球で語り継がれる名勝負の話になり、私が兄貴と興奮しながら見た昭和５４年夏の箕島対星稜延長１８回の激闘や、ＫＫコンビ活躍の試合、平成１０年夏の準々決勝、松坂大輔選手が延長１７回を投げ切ったＰＬ学園対横浜の試合など昔話をひと通りして、結局、４時間近くなるＰＬ学園対横浜戦をYouTubeで夜遅くまで観戦しました。そして、不思議なことにその何日か後に、令和の名勝負に出会ったのです。早稲田実業（西東京代表）と大社（島根県代表）との試合です。甲子園球場で初めて開かれた１００年前の大会に出場した早稲田実業、夏の全国高校野球の地方大会に第１回大会から欠かさずに参加している大社、阪神甲子園球場１００周年記念大会にふさわしい、伝統校どうしの対戦でした。また、大社は、１回戦今春の選抜大会準優勝の報徳学園を３対１で下し、２回戦では長崎県代表創成館を延長１０回タイブレークの末５対４で破って３回戦へ勝ち進んできました。早稲田実業との試合、今でもインタビュー記事など見ると胸が熱くなる色んなことが詰まった名勝負でした。試合は、後攻の大社が１回裏に１点先制し、６回表に早稲田実業が追いつき１対１。そして７回表、先頭バッターがセンターへのヒットを打ったのですが、その打球をセンターが後ろに逸らしバッターが一気にホームに還って２対１。早稲田実業リードのまま９回裏、大社はノーアウト一・三塁でスクイズを決めて２対２の同点、１アウト二・三塁の場面で早稲田実業はレフトを内野手に交代させピッチャーと三塁ベースの間に置き、内野を５人で守るシフトを敷く奇策でダブルプレーとし、試合は延長戦へ。延長はノーアウト一塁、二塁から始まるタイブレーク、１１回裏、代打の絶妙なバントでノーアウト満塁のチャンスを作り、次の打者のタイムリーヒットにより、２対３で大社がサヨナラ勝ちしました。この１１回裏の攻撃にもドラマがありました。その状況は、試合後のインタビューを見て知ったのですが、中日スポーツの記事によると次のように書かれていました。―（略）試合が動いたのが１１回裏だった。無死一・二塁代打で登場したのが背番号１２の安松大希（２年）。島根大会を含め、今夏初出場だった。その安松が三塁線に転がしたバントが安打となり、１４９球を投げた馬庭のサヨナラ打につながった。試合後のＮＨＫのインタビューで安松の起用について問われた石飛監督は「もちろん、初出場だというのは分かっていました。ただ、あの場面で選手を集めて聞きました。『ここでバントを決められる自信がある者、手を挙げろ』と。そうしたら安松が手を挙げて、『サード側に決めてきます』と言ってくれたので、私は信じるだけでした」と声を詰まらせた。「そのバントを見て、どうでした？」と尋ねるアナウンサーの声も裏返り、石飛監督は「泣けてきましたね」と答えてまた涙。（略）―と。このやり取りをテレビで見ていて、私も泣けました。今でも、泣けます。また、日刊スポーツの記事によると安松選手は、―（略）自主練習で打撃練習の前に必ずバント練習をする。『人一倍やっていると思っています』という自負があった。出場機会がなくとも『自分は秘密兵器だと思っているので』とポジティブに過ごした。（略）―とのことでした。

先頭打者、代打でのバントが成功した１１回裏の場面、大観衆が驚くような最高のバントをどうしてあの場面でできたのか、練習の賜物であることは当然ながら、私なりに解釈してみると、まずは選手本人が、自

ら考え自らの判断と責任のもとで行動し、「俺のバントをみんなよく見とけよ」というような気持ちで、「自信」をもって、バッターボックスに立ったこと。練習の時から単なる練習でなく、常に試合のことを想定して、「集中力」を高めて取り組み、また、バッターボックスに立った時も同じように「集中力」を高めて臨むことができたこと。そして、甲子園という舞台を自分なりに楽しんでいたことなどではないかと推察します。

十分準備して、「自信」を持って、「集中」して臨む。スポーツに限らず、発表会、学業等においても同じことがいえると思います。また、緊張する場面であると思いますが、自分との戦いでもあって、そのプレッシャーを「楽しむ」ことができれば結果はついてくると思います。もし、その場面で結果が出なくても、必ずどこかの場面で役に立つことになるはずです。来年の干支は巳年、ヘビは脱皮を繰り返し成長することから、新しい始まりや変化を意味しているそうです。新たな年、自らの殻を破り、一つでも多くの経験をして、それを自信に力強く成長されることを願っております。

＜用語の説明＞
・デマンド制御装置：使用電力の瞬間稼働負荷値（デマンド値）を監視し、空調機を制御する装置。電力使用量に応じ超過警報が鳴る。なお、デマンド値は電力会社の基本料金を取り決める基準となる。
・夏日：最高気温２５℃以上の日、真夏日：最高気温３０℃以上の日、猛暑日：最高気温３５℃以上の日
・ＫＫコンビ：ＰＬ学園高校に昭和５８年４月から昭和６１年３月まで在籍し春・夏の甲子園で主力として活躍した桑田真澄・清原和博の２人を指す通称。由来は２人の名前の頭文字をとったもの。

中学　北辰行

中学校体育科　塩塚拓

１１月２９日（金）に第２１回北辰行が実施されました。

今年度は、小佐々町の「冷水岳公園」でした。昨年の神崎鼻コースと途中まで同じ道でしたが、最後の６㎞はひたすら急な山道を登るという過酷な道のりを歩きました。

当日の天候は曇りのち雨。しかも、極端に気温が下がった当日・・・中止も考えましたが、北辰行の本来の目的は「タフな心身を育成するため、北辰の志を先人に学び、耐寒・鍛錬歩行を行う。」ことであるため、予定通り実施することを決断しました。

そんな心配もよそに、カッパを身にまとい、力強くゴールを目指す勇ましい姿、また、先輩が後輩を支える優しい声掛けや、歩調を合わせ後輩を待つ姿勢に、体力だけではなく、精神面での大きな成長を感じることができました。

当日を迎えるにあたり、コースの下見や計画・運営にご尽力いただいたＰＴＡ役員の皆様、当日の交通指導でご協力いただいた保護者の皆様、また、温かいお声掛けと補食を支給いただいた活動サポート役員の皆様、職員一同心より感謝を申し上げます。おかげさまで今年度の北辰行を無事に終え、お子さま心身の成長へとつなげる行事となりました。

来年度は西海橋コースとなります。何卒ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

高校

校内マラソン大会

高校体育科　中村岳博

１１月１３日（水）、相浦総合陸上競技場で校内マラソン大会が行われました。例年にない暑さが心配されましたが、当日は適度な気候で実施することができました。

男子１０キロ、女子６キロのコースを完走するため、生徒たちは校内でのペース走、校外でのロード走に真剣に取り組んできました。当日も真剣な姿が随所に見られ、生徒たちの成長を感じられたように思います。

個人的な感想ですが、昨年、女子の部で悔しい思いをした２－５芦塚陽菜さんが１年越しのリベンジで見事に優勝を飾った姿に大きな感動をもらいました。ありがとう、よく頑張りました。

また、本年度からは女子の部にも給水所を設け、サポート本部のお母さま方にも更なるご協力を頂きました。本当にありがとうございました。

個人の部	１位	２位	３位	４位	５位
男子	富永　勲 （1－４）	山口　大輔 （１－５）	山本　弘明 （2－６）	吉永　結翔 （１－４）	末永　千隼 （２－３）
女子	芦塚　陽菜 （２－５）	小田　夢香 （１－６）	野中　愛羅 （２－３）	田渕　凜 （１－４）	小川　桃佳 （2－6）

クラスの部	１位	２位	３位
	２年１組	１年６組	２年５組

高校

台湾修学旅行

高校２学年主任　岩永　千草

高校2年生は12月11日よりA団が、12日よりB団が台湾へ3泊4日の修学旅行に行ってきました。

新型コロナ感染症が第5類に移行し、本校は5年ぶりに海外への修学旅行に行けることになりました。行先は「台湾です。」と生徒たちに発表したのは昨年の9月。発表した時の生徒たちの反応は非常に薄く、海外に行くことができるのに楽しみではないのかと心配になりました。しかし後々生徒たちに聞いてみると「台湾」という国がどういう国か知らなかった。私たちはベトナムではないんだ。という気持ちが強かったと話してくれました。しかし台湾について調べ学習を行ったり、台湾と日本の関係を地歴公民科の先生に話をしていただいたりしていくうちに台湾という国が少しずつ分かってきたようでした。

修学旅行初日からA団もB団も飛行機が遅延したり、荷物がいつもと違う場所に届いたりして、故宮博物院の見学時間は数十分ととても短いものになりました。中国の歴代王朝が収集した美術品が埋蔵している博物館だっただけに残念な気持ちになりましたが、また来たいと思える場所に変わり生徒たちの興味もよ

り一層深いものになりました。台北は日本で言えば東京のようなところです。どこへ行っても大渋滞で交通事情に悩まされました。どの見学地も時間通りに到着することはできませんでしたが、生徒たちは少ない時間でも最大限楽しんでいる様子でした。修学旅行のメインである臺北市立南湖高級中學校との交流会では、現地高校生の日本語の上手さに圧倒されました。また、台湾の高校生とともに現地の音楽・民芸体験・書道体験をさせていただき、そこで異文化に触れこともできました。台湾の高校生は非常にフレンドリーで少しシャイな本校の生徒達もすぐに打ち解けることができました。B&S大学生との自主研修も台湾の観光地をたくさん案内してもらい満足のいく研修となりました。研修中に台湾で流行りの食べ物や美味しいカップラーメンなども紹介してもらいました。

今回の修学旅行は「生徒主体」を目標に掲げ、修学旅行委員会を中心に動いてもらいました。学校交流のダンスパフォーマンスの計画や旅行中の服装など何度も何度も話し合いを重ね実行することができました。また、夕食時には生徒たちがしゃぶしゃぶダンスや漫才を、先生(父親)と生徒（息子）が親子漫才を披露してくれ、会場を爆笑の渦に巻き込んでくれました。皆が心から楽しめる修学旅行となりました。具合悪くなった生徒が「ゼロ」だったことも奇跡です。

今回の旅行をきっかけに日本のよさを再確認することができたと思いますし、異文化に触れることにより少しでも海外に興味を持ってもらいたいと思います。これから世界で活躍する生徒たちになってくれると願いつつ修学旅行の報告を終えたいと思います。謝謝。

大谷翔平５０－５０ボールをバックに
台北１０１にて

B&S研修　龍山寺にて

学校交流

年末年始行事予定

（　）の数字は対象学年

月　日	曜	中　学	高　校
１２月２５日	水		冬季補習（～１２月２７日）
２８日	土		共通テストプレ(3)
２９日	日		共通テストプレ(3)
１月　４日	土		共通テストプレ(3)
５日	日		共通テストプレ(3)
６日	月		冬季補習(3)
８日	水	始業式、水の②～⑦の授業	始業式　校内実力(1),(2)、水の②～⑦の授業(3)
１０日	金	PD（金④）	
１１日	土	県中入試会場設営	
１２日	日	県中入試　生徒自宅学習	
１３日	月	成人の日	
１４日	火	生徒自宅学習	